

個性派映画 市民が上映50作

「横浜キネマ倶楽部」閉館の元従業員ら奮闘

ミニシアター文化守り10年余

かつて閉館した映画館の元従業員らの呼びかけで立ち上がった映画の自主上映サークル「横浜キネマ倶楽部」が4日、50作品目の公開を迎える。「ハマの映画の灯を消すな」と声を上げて10年あまり。思いは今も受け継がれている。

節目の作品は、16年公開の「袴田巖 夢の間の世の中」（金聖雄監督）。1966年に静岡県で起きた



運営委員会で上映する映画の内容などを詰める＝横浜市中区

「袴田事件」で死刑が確定し、14年3月に再審開始決定が出て釈放された袴田巖さん(80)の日常を描いたドキュメンタリー映画だ。横浜キネマ倶楽部の立ち上げは2005年5月。横浜のミニシアターの草分けとして親しまれた「関内MGA」（旧・関内アカデミー）などが、シネマコンプレックスの進出などで、相次いで閉館していた時期だ。

シネコンではお目にかかれない個性的な映画を上映するミニシアターの文化を残そうと、元従業員らが奮闘。地元を中心に映画好きの有志たちが倶楽部をつくった。企画を持ち寄るなどして映画を選び、戦時下の人々を描いた「美しい夏キリシマ」を皮切りに年数本



節目の50作品目となる「夢の間の世の中」のシーン＝横浜キネマ倶楽部提供

のペースで上映を重ねてきた。今回で50作品目だ。

上映作品は、10人あまりの運営委員がプレゼンテーションで決める。今回企画した岡田明紀さん(47)は「自由な雰囲気で作品が決められ、企画した人が窓口役となる」。スタッフは全員が手弁当で、岡田さんも普段は都内のソフトウェア会社で働く。わずかな資金で、赤字が出ないようにやりくりしながらの活動だ。

金監督(53)は「ドキュメンタリーを上映する館が減っている中、つくる側としても励みになる」と話す。倶楽部の立ち上げメンバーの伊藤幹郎・元会長(76)は「社会性、人間性が描かれている映画を選んできた」と振り返る。神谷秀明事務局長(48)は「メッセージ性がある、ファンの共感が得られるような映画をこれからも上映し続けたい」。いつか倶楽部の映画館を持つのが夢だ。

4日は、同市神奈川区の神奈川公会堂で、午前11時と午後2時10分の2回上映。チケットは当日1300円。午後1時10分にはプロデューサーの陣内直行さんの講演もある。問い合わせは横浜キネマ倶楽部(080・8118・8502)。

(豊岡亮)